

長野大学 企業情報学部 企業情報学科

インターネット放送局

～その問題点と解決策～

J08031 高橋明英

2012/01/31

はじめに

研究目的～自己表現の場としてのインターネット放送局～

本論文は「インターネット放送局」を取り上げている。インターネット放送局の問題点はその可能性が十分に検討されていない点である。近年の急進的な技術革新によってその可能性は夢幻に広がっているにもかかわらずである。

「放送局」と言うと「映像」が主となるイメージがある。しかし、この「放送局」という用語は一種の比喻であると筆者は考えている。筆者なりにインターネット放送局というものを定義するのであれば、「インターネットを用いて個人若しくは団体の情報発信を行うもの」となるだろう。かつては手段が限られていた公への自己表現を容易に行うことがインターネット放送局によって可能となった。個人でホームページを開設することに始まり、Weblog、Twitter、Facebook 等手段は幾種類も存在する。これら静的なメディア活用以外にも Ustream やニコニコ生放送、Stickam などを用いた動的メディアによる自己表現も可能となった。

筆者はインターネット放送局というものが「歴史」を記録する上で最適の手段では無いかと考えている。「歴史」とは言っても大仰なものではなく、個人的な日々の暮らしをアーカイブすることや、個人の思想・信条を記録することを指す。こういった「歴史」というものは記録されないと消滅する。「伝記」と呼ばれる書籍が次々と発行されていることや、「自分史」というものが行われ続けていることを考慮すると明らかであろう。

古くはそれに「日記帳」といった紙媒体が使用されていた。ところがこういった紙媒体の記録というものは、紛失や焼失と入った要因により消滅しうる危険性をはらんでいる。このような問題はインターネット上に「データ」として保存することにより、完全ではないものの解決を図ることが出来るのではないだろうか。データの特徴としては複製が容易であり、劣化しない点があげられる。その点から複数のサーバーやオンラインストレージ、動画共有サイトにアップロードしておくことによりリスクマネジメントが可能となるだろう。

動画に目を転じてみると、かつてはテレビジョンでしか行うことが出来なかった「ライブ放送」というものを個人が行えるようになった点大きい。その環境下ではどのような「放送」を行っても基本的には許される。自らの自殺の様子を生中継した例もあるし、

出産の場面を生中継した事例もある。距離の制約もないため、大学等の講義を「放送」することにより「サテライトキャンパス」を実現することも可能となる。

こういった個人やマスコミ以外の団体が主体となった情報発信が行われると、数年後にはテレビジョン放送というものは現在とは大きく姿が変わると思われる。コスト面で検討すると、スポンサー契約という形でテレビ局にお金を払うよりもインターネット放送をしようとするほうが安くなる場合があるためである。しかし、それでもテレビジョン放送がなくなることはありなからう。

このように列記しただけでもその可能性は様々である。しかし、それが実現しているかという点に甚だ疑問である。そこにはどのような制御要因があるのだろうか。筆者としては「GLの壁」というものがその一因として挙げられると考えている。「GLの壁」というものは世代間（Generation）と地域間（Location）に隔たる興味関心の差のことを指す。これについては本論文第1章において詳しく解説する。それ以外にも様々な問題点が考えられる。「見られなければ意味が無い」と思ってしまう思い込み、「アクセス側の主体性」等枚挙に暇がない。

インターネット放送局の問題点は可能性が無限大に広がっている。それを十二分に活用する技術やアイデアが重要視される時代がまもなくやってくるだろう。インターネット放送局は自己表現の場として最適であることは確かである。

本論文がすべてのインターネット放送局を行おうとしているものに対し、わずかでも役立てることがあれば筆者としては幸いである。

2012年1月 高橋 明英